

8 家庭科

宮本 真由美

1. 家庭科と自立

家庭科＝自立を援助する教科とはっきりいえるわけではないが一人の生活者として自立して生きる人間を育てることは家庭科教育の目的である。

家庭科教育は究極的に、一人一人の子どもがよりよい生活をめざす実践的な態度を育てることである。それぞれの子どもがその持ち味を発揮し、進んで家庭生活の課題に関わり、課題を解決するために考えたり、工夫したり、試みたりする子どもの主体的な学習活動が効果的である。それは、ふだん何気なく過ごしている生活をしっかり見つめ、そこにあるよさや課題に気づくことから始まる。「へー知らなかった」「なぜなんだろう」「やってみたい」「どうすればいいのだろう」「誰かに聞いてみよう」「調べてみよう」「自分ならこうする」など自分との関わりで感じ、考えることで出発するのではないだろうか。

現在、社会の変化に伴い、子どもたちの姿にも変化が見られるようになったといわれる。例えば、生活が便利になり、手足を動かして働かなくても十分快適な生活を送ることができるようになったが、そのことで、子どもたちが作業を工夫したり成し遂げた後の充実感や喜びを味わったりする経験が少ない。また、兄弟姉妹や家族数も減り、家事の機械化などで、人と関わりながら生活することも少なくなっている。そのため、基本的な生活技能や勤労観の体得、人との協調性などについて習得することが難しく、自立が遅くなっているともいわれている。

これらの問題のすべてを解決していくことが家庭科の目的ではないが、家庭科が自立に向かう子どもたちの援助となるのなら、その方法を探っていくことは大変意義深いと考える。

2. 自立を育む家庭科の授業

子どもたち一人一人が、より主体的に活動し、自らの力で課題を解決していくためには、めいめいの考えを生かした学習活動の場を保障していかなくてはならない。主体的な学習活動を展開するには、家庭生活への「関心・意欲・態度」はもちろんであるが子ども自身が、それまでの生活経験や学習経験で身につけた知識、技能、その他自分で考えたり試行錯誤したり判断したできるように、すべての活動において「自分なら」という意識を持つことができる活動を設定することが重要である。また、子どもが自分の思いや願いを具体的にあらわし実践しようとするには、技能や表現力が必要であり、それらを支える知識や理解も必要になる。したがって、子どもが受け身的に反復練習によって身につけていく技能ではなく、意欲的に課題に取り組む過程で必要感から考えたり工夫したりすることにより自然に身につけていくことが子どもたちの自立を育む第一歩と考えるのである。

3. 家庭科でめざす子ども像

上記のようなことをふまえて、めざす子ども像を次のように設定した。

- (1) 日常生活を課題をもって見つめ、気づきを持つことができる。
(観察の視点を持っている。)
- (2) 友だちや家族などの関わりを大切にしながら、自分らしい生活をめざして考え、実践する子ども

(人との関わりの中で自分のよさを発揮できる。)

- (3) 課題解決の方法を自分の思いの実現のために自分で選んだり考えたり決めたりすることができる子ども。

(自己決定することができる。)

- (4) めあてを持ち、計画的に実践することができる。

(見通しを持つことができる。)

- (5) 他の考えや作品の優れている点に気づくことができる子ども。

(多様なものの見方、考え方を認めることができる。)

4. 自分で決めることを大切に学習とするために

「自分で決める」からこそ、決めたことに対して本気で集中し、没頭できるものである。また、「自分で決める」からこそ、責任を負うものである。様々な選択肢のうち、自分で一つ「決める」までの過程には、その子なりの考えが一番強く反映するものである。何を基準に選んだのかということがその子らしさになっている。毎日の生活の中でもあらゆる場面で自己決定は行われている。成長するに従い、その頻度はますます高くなる。何を選択し、どう生きていくのか。「生きる力」を育てていく上でも重要である。

できるだけ「自己決定」できる機会を作り、子どもに任せる場面を作りたい。その際、自分で決めたことが、他との関わりの中でどう生かしていけるのかについて考えていきたい。つまり、作るものや課題を「決める」だけではなく、「自分の思いの実現に向けて他との関わりの中でどうするか」という決定が求められると考える。

5. 自立に向かう子どもたちを育む家庭科の授業の具現化に向けて

- (1) 学習の見通しをもてるようにする

製作、調理実習を実施するにあたっては、目的意識を十分に持たせながら子どもたちの願いを大事にした活動計画を立てるようにする。

- (2) 体験的学習を取り入れる

少なくなっている子どもたちの生活経験を補っていけるよう一人一人が実際に自分の手を動かし、体を使って体験できる場の設定が大切である。これは技術面だけではなく、思考面でも同じことがいえる。つまり体の様々な感覚を通して、学習の中で試行錯誤を繰り返しながら学習を深めていくことができるといえる。

- (3) 自分の生活に生かす

まずは、自分の生活を見つめる機会をできるだけ多く設け、その中から課題を見つけることができるようにする。そこから自分のめあてを持ち、学習を深め、最終的には、学習したことをまた自分の生活に返して生かしていくことができるようにする。そのためには、子どもたちが実践してみよう、したいと必要感や期待感を持つような題材が選ぶことも大切である。

- (4) 個の確立と友だちとの関わり

友だちのよさに気づくためには、まず自分をよく知り、自分の考えを持つことが必要である。また、一人一人のよさは、他と関わるることによってはじめてよさとなる。子どもたちが自分のよさに気づき、認め、更に友だちのよさに気づき認め合うことができれば、よりよい生活を創造することができるようになると思われる。

引用・参考文献

- 1) 家庭科教育実践講座刊行会、『第1巻21世紀を生きる子どもを育てる新しい時代の家庭科教育』、ニチブン、1998、p.42-48

成果と課題

(1) 自立を育む家庭科の授業について

○ 「自分なら」

という意識を持つことができるような活動を設定するよう試みた。また、意欲的に課題に取り組む過程での必要感から考えたり工夫したりできるような授業もめざしてきた。1年次では学校の中の環境問題を取り上げ、課題ごとにグループを作り、自分たちで調べたりした。そして調べた結果を紙芝居や劇などいろいろな表現方法の中から選択し、みんなで考えていこうと各クラスに発表（アピール）した。2年次では、食品を選ぶとき、どんな選び方をすればよいのか。おいしく安全に調理するためには材料を自分できちんと確かめて購入することも大切だということを牛乳の鑑定（飲めるか飲めないか）を通して学習していった。そして3年次（本年度）は、野菜について自分たちで調べ、そのよさを生かして自分で考えたより健康的な野菜料理を考えるというものである。また、これを学校給食とつなげ、より生活に密着させようとしてみた。3年間通して「自分なら」の基準で生活を見つめ、挑戦してきたように思う。生活は自分で創っていくものである。何をどう選択するかでそれぞれの方向へと向かう。その基礎となるために家庭科の授業ではどんなことができるかを探ってきた。この積み重ねが後の個性へと花開いていくのではないか。個性が確立していくようすが自立に向かう子どもたちなのかもしれない。そのような点から考えてみると、これまでの授業は少なからず自立を育んできたように思う。しかしながら課題も見えてきた。

(2) 家庭科でめざす子ども像について

○ 「友だちや家族などの関わりを大切にしながら、自分らしい生活をめざして考え、実践する子ども」（人との関わりの中で自分のよさを発揮できる。）

この3年間で特に重視してのものである。知識や技能などの基礎基本的ものもちろんのことだが家庭科としては家族や友だちとの関わりを大事にしていきたいと考えている。関わりをもたせていくために、1年次では各クラスに発表し、全校のみんなとつながるようにした。2年次では牛乳の鑑定の仕方を確かめるために、学校で牛乳を仕入れている牛乳工場の品質管理室の方に来ていただき、詳しいお話を直接聞いた。3年次では、給食室の先生や調理員の方、そして全校のみんなとの関わりをもつことができた。その中で課題に感じていることは、家族との関わりが少なかったということである。学校内ではある程度の関わりを作ることができたが、家族の中で自分らしく生活していくという点において今後さらに研究していく必要がある。

(3) 自分で決めることを大切にした学習について

○ 自己決定

「自分で決める」については、グループの力を借りたりしながら決定していった。自信のない時には友だちと相談しながら友だちと一緒にすることもよく見られた。自己決定の場面では相談することも決めるための大切な要素であると考え。グループの決定も自己決定ととらえ大切にしてきた。その時、なぜそれを決定したのかについての理由付けが重要である。選んだ理由、何を基準にして選んだのかをはっきりさせることが次の場面へ生きる要素となりうる。その点で反省すべきことが多い。

○ 自分の思い実現に向けて

他との関わりの中で自分の思いをどう実現していくかが問われてくる。活動を通して自分を知り、友だちの考えを知り、家族への理解を広げ、共に生活する喜びを体験させていきたい。